

# とちぎ学力向上推進事業

(とちぎっ子学力アッププロジェクト)

－ 平成 26 (2014) 年度～令和 7 (2025) 年度 －

## 12 年間の取組のまとめ

令和 8 (2026) 年 3 月  
学力向上検証委員会

## 目 次

I	はじめに	1
II	とちぎっ子学力アッププロジェクトについて	
1	プロジェクトの目的	2
2	基本的な考え方	2
3	これまでの取組	2
III	これまでのとちぎっ子学力アッププロジェクトの取組による成果と課題について	
1	プロジェクト全体について	4
2	とちぎっ子学習状況調査について	7
3	県教育委員会の主な支援について	11
	○ 教師の指導力	
	(1) 各種派遣事業	11
	(2) 学力向上推進リーダー配置事業	13
	(3) 学力調査結果活用研修会	16
	(4) 指導資料	16
	○ 子どもの学ぶ意欲・学習習慣	
	・ パワーアップシート	17
	○ 保護者の理解・協力	
	・ 保護者啓発資料の作成・配布	18
4	今後の取組に向けて	19
IV	おわりに	21
	参考資料	22

## I はじめに

栃木県教育委員会では、児童生徒一人一人が夢や希望に向かって力強く自己実現を図ってけるようにするためには、確かな学力を育成することが重要であると考え、「とちぎの子どもの基礎・基本」及び問題事例集の作成や抽出による習得状況調査の実施など、諸施策を実施してきた。しかし、全国学力・学習状況調査の結果等からは、学力向上の基盤となる生活・学習習慣についてはよい傾向が見られるにもかかわらず、それが学力向上に結び付いているとはいえない状況がみられた。

このような中、有識者による「とちぎの子どもの確かな学力向上検討委員会」が平成 23 年度に設置され、児童生徒一人一人の学力を保証するために、栃木県独自の学力向上対策や学力調査の在り方について検討が行われた。そして、平成 24 年 3 月に、同委員会における意見を基に、今後の本県における学力向上対策の方向性をまとめた「とちぎの子どもの確かな学力向上について 提言」（以下、「提言」という）が作成された。提言では、「悉皆による学力調査を取り入れることにより、児童生徒一人一人の課題を明確にし、目標をもって学習する機会を与えること、また、教員一人一人が指導上の課題を把握する機会をもつことにより、学力向上のための学習指導改善の P D C A サイクル（検証改善サイクル）を確実に機能させることが期待できる」と示された。

そこで、県教育委員会では、これまでの学力向上に向けた取組を発展させ、本県児童生徒一人一人の学力向上を目的とした「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を平成 26 年度から実施することとした。プロジェクトの推進に当たっては、県版学力調査である「とちぎっ子学習状況調査」を実施し、児童生徒の学力を正確に把握することと併せ、調査から見いだした課題解決に向けて、各学校が検証改善サイクルの構築・運用を確実に図る取組を推進してきた。

また、プロジェクトを検証し、改善を図るために、有識者 11 名により構成される「学力向上検証委員会」をプロジェクト初年度から設置し、これまで各年度 3 回開催してきた。本委員会では、プロジェクトの要である「とちぎっ子学習状況調査」の妥当性及各種派遣事業、配置事業、更に県教育委員会による学校や市町に対する支援の効果等について、協議を行ってきた。本資料は、検証委員会の協議における意見や提案等を、「とちぎ学力向上推進事業（とちぎっ子学力アッププロジェクト）-平成 26（2014）年度～令和 7（2025）年度- 12 年間の取組のまとめ」として作成したものである。

令和 8（2026）年 3 月

令和 7（2025）年度学力向上検証委員会  
委員長 人見 久城

## Ⅱ とちぎっ子学力アッププロジェクトについて

### 1 プロジェクトの目的

とちぎっ子学習状況調査を要として、義務教育9年間の学びの連続性を重視した本県独自の学力向上システムを構築し、児童生徒一人一人の学力向上に資することを目的とする。

### 2 基本的な考え方

悉皆による県版学力調査である「とちぎっ子学習状況調査」を実施するとともに、調査を要とした本県独自の学力向上システム※<sup>1</sup>を構築することで、児童生徒の主体的な学びを確立し、学力向上を図る。

プロジェクトの実施に当たっては、義務教育9年間の学びの連続性を重視し、児童生徒一人一人に結果をフィードバックすると同時に、教師自らの指導改善を図る取組や各学校の調査結果を活用した検証改善サイクルの構築・運用を支援することに、一層重きをおくこととした。

なお、検証改善サイクルの運用に際しては、全国学力・学習状況調査や市町教育委員会が実施する学力調査の結果を反映させることも推奨している。

### 3 これまでの取組

県教育委員会では、「とちぎの子どもたちの確かな学力向上について 提言」において示された本県独自の学力向上対策として、平成26年度から「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を実施してきた。

本プロジェクトの推進に当たっては、県版学力調査であるとちぎっ子学習状況調査を実施し、児童生徒の学力を正確に把握することと併せ、調査から見いだした課題解決に向けて、調査問題を年間指導計画や評価計画に位置付ける等、調査を効果的に活用することを促してきた。また、県教育委員会では、「教師の指導力」、「子どもの学ぶ意欲・学習習慣」、「保護者の理解・協力」の3つが学力向上の柱であると考え、それぞれの柱に対して複数の手立てで支援すること（p.3「とちぎっ子学力アッププロジェクトの全体構想図」参照）により、学校における検証改善サイクルの構築・運用を推進してきた。このように、調査を要とした本県独自の学力向上システムを構築することで、児童生徒一人一人の主体的な学びを確立し、学力向上が図られるよう学校や市町教育委員会の取組を支援してきた。

学校や市町教育委員会に対する具体的な支援として、主に次の3点が挙げられる。

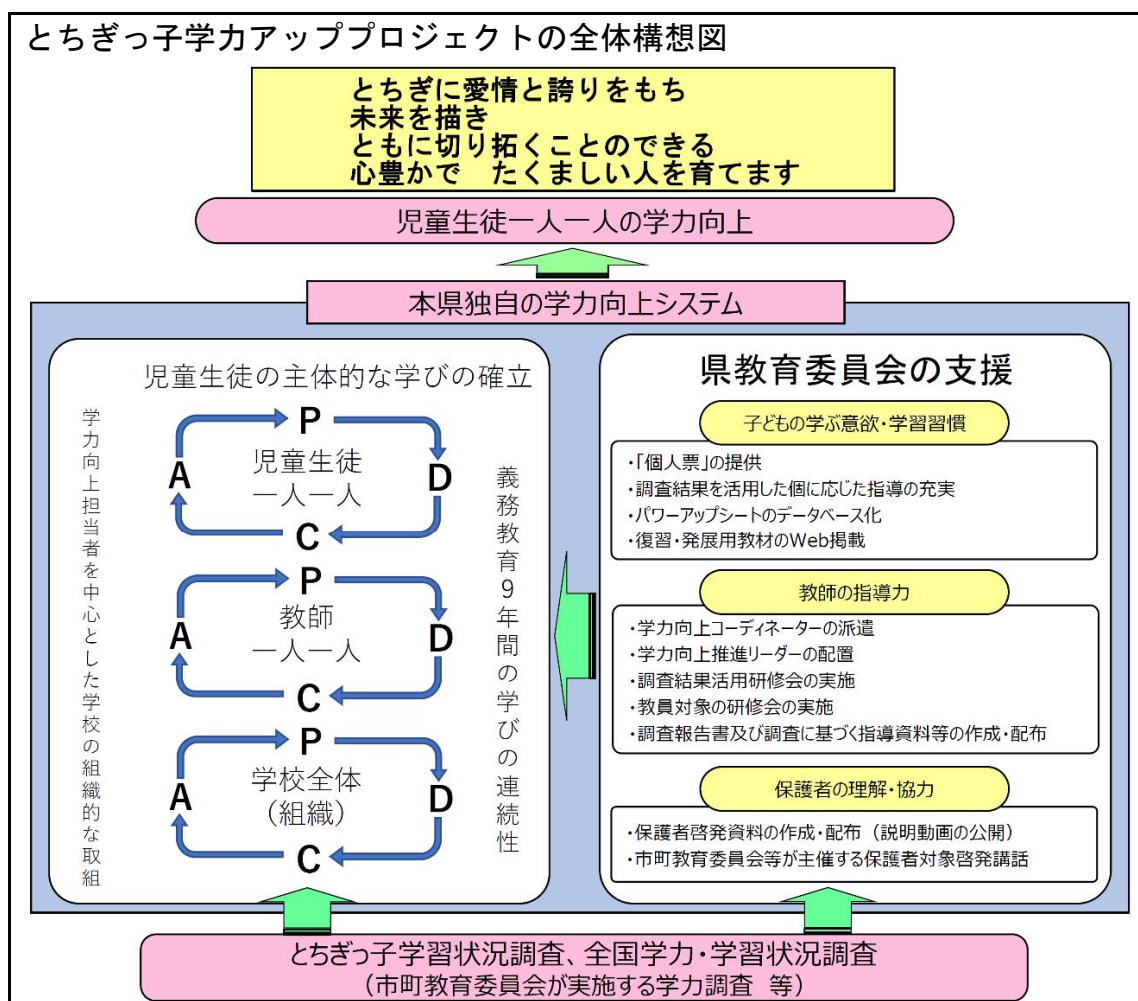
1点目は、これまでの4つの派遣事業による学校や市町教育委員会への支援である。まず、平成26年度から3年間、学習指導及び学校組織マネジメント等に豊富な知識と経験を有する学力向上アドバイザーを県内全公立小・中学校に派遣し、とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や学習指導における検証改善サイクルの構築・運用についての支援を行った。次に、平成29年度からは、学力向上応援団派遣事業として、学力向上専門員を25市町内の約180校に派遣し、同一校において2年間継続して課題解決に向けた取組を支援した。令和元年度、令和2年度の2年間は、学習指導上の課題解決に向けて意欲的な11市町、約100校に学力向上指導員を派遣し、課題解決に向けた市町教育委員会や学校の取組を支援した。令和3年度から5年間は、学力定着に課題を抱える18市町、約150校に学力向上コーディネーターを派遣し、市町における学力向上に向けた取組や学校における授業改善の取組を支援してきた。これまでの派遣事業による継続し

※1 とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果を効果的に活用し、県教育委員会が市町教育委員会と連携・協力して学校等の取組を複数の手立てで支援することにより、検証改善サイクルの確実な運用を図り、児童生徒一人一人の学力を向上させる仕組み。

た支援により、学校や市町教育委員会において検証改善サイクルの構築・運用が着実に図られ、学力向上に向けた組織的な取組が充実してきた。

2点目は、教員の指導力向上を図るための学力向上推進リーダー配置事業による支援である。平成29年度から、小学校における国語と算数の教科指導に実績のある教員を学力向上推進リーダー（以下、推進リーダー）に認定し、9年間で186校の小学校や義務教育学校に配置してきた。また、令和6年度からは、本事業を中学校にも拡充し、教科の枠を越えた中学校全体の取組を支援してきた。配置校においては、授業者に対する助言やチーム・ティーチング等の日常的な支援により、教員一人一人の、特に若手教員の指導力向上が図られた。また、校内研修体制への支援を行うことで、学校全体の学力向上に向けた取組の充実が図られた。

3点目は、とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の調査結果等を踏まえた学習指導の改善に関する説明や講話の実施と、教員や保護者向け資料の作成・配布等を通じた、各学校の学力向上に関する取組の改善・充実を図るための支援である。プロジェクト開始時から、小・中学校の全ての学力向上担当者を対象にした学力調査結果活用研修会の開催や、学力向上通信等の指導資料の作成を通して、調査結果の分析や学力向上改善プラン、学力向上改善レポート※2の作成・活用などについての理解を促してきた。これらの支援により、学校や教員、児童生徒それぞれの検証改善サイクルの確実な構築と運用が図られるとともに、保護者啓発資料の作成・配布により、家庭における児童生徒の学習状況等の改善が見られた。



※2 学校は、学校課題や学力調査結果等を踏まえて「学力向上改善プラン」を作成し、全教職員が自校の目指す児童生徒像を確認するとともに、課題解決に向けた方策を共有し、学校全体で組織的・重点的に取り組む。また、年度末に検証を行い、学力向上に向けた取組の成果や課題を「学力向上改善レポート」にまとめ、県教育委員会に提出する。

### Ⅲ これまでのとちぎっ子学力アッププロジェクトの取組による成果と課題について

#### 1 プロジェクト全体について

##### (1) 取組の成果

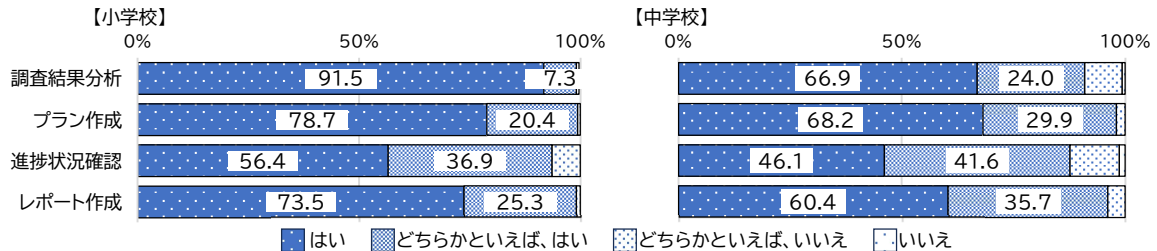
これまでの取組により、各学校においては、各種学力調査結果等から自校の強みと課題を見だし、組織的に学力向上改善プランや学力向上改善レポートを作成し、課題解決を図る検証改善サイクルの構築が確実に図られてきた。

また、平成 26 年度以降、市町教育委員会においては、とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査と併せて独自の学力調査を実施し、学校の取組の検証の機会を位置付けたり、実態を踏まえて市町独自様式の学力向上改善プランを作成したりするなど、学力向上に向けた特徴的な取組が充実してきている。

これらの取組により、本県全体の全国学力・学習状況調査の各教科の標準化得点<sup>※3</sup>の平均値は、プロジェクト発足から 2 年後の平成 28 年度の結果から徐々に右肩上がりの傾向が見られ、令和 3 年度においては、小・中学校ともに全ての教科で 100.0 となり、近年は全国と同程度の学力を維持している。

#### 令和 7 (2025) 年度とちぎっ子学習状況調査「検証改善サイクル」に関する学校質問調査結果

検証改善サイクルの構築・運用に関するそれぞれの段階の質問に対して、「はい」「どちらかといえば、はい」と肯定的に回答した学校が、小・中学校ともに 80% を超えている。特に、「調査結果分析」についての肯定的回答の割合は、小・中学校ともに、これまでの調査の中で最も高い結果となった。

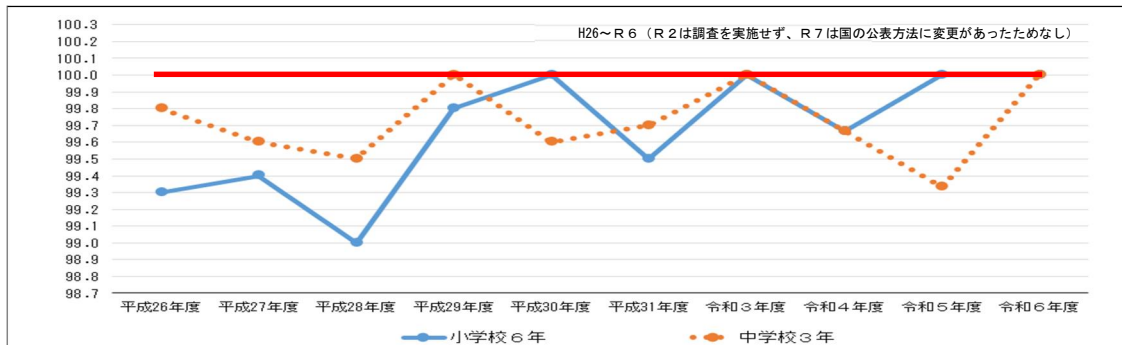


##### 各質問項目の内容

- 調査結果分析： 調査結果の分析を全教職員で行っている
- プラン作成： 学力向上改善プランの内容の作成に当たっては、学力向上担当者を中心に、教員間で課題や改善策について話し合っている
- 進捗状況確認： 職員会議や学年会、教科部会等の機会に、学力向上改善プランを踏まえた課題解決の進捗状況について話し合っている
- レポート作成： 学力向上改善レポートの内容の作成に当たっては、学力向上担当者を中心に、教員間で課題の解決状況や改善策について話し合っている

#### 全国学力・学習状況調査における本県（公立）の標準化得点の平均値の推移

	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R3	R4	R5	R6
小学校	99.3	99.4	99.0	99.8	100.0	99.5	100.0	99.7	100.0	100.0
中学校	99.8	99.6	99.5	100.0	99.6	99.7	100.0	99.7	99.3	100.0



※3 全国平均が 100、標準偏差が 10 となるように標準化された得点。全国学力・学習状況調査は、年度ごとに設問数や問題の難易度を揃えていないため平均正答率による年度間の比較はできないが、標準化得点により、過去の調査結果との相対的な比較をすることが可能となる。

また、児童生徒質問調査の結果から、児童生徒個人の自己肯定感や自己有用感に関わる質問において、肯定的回答の割合が高くなっていることが分かる。これは、本プロジェクトを通して、学校や家庭において、児童生徒をほめ、よさを認めるなどの関わり方を促してきた成果である。

- 自己肯定感・自己有用感に関わる内容について、平成26年度と令和7年度の比較  
「はい」または「どちらかといえば、はい」と肯定的に回答した割合(%)

学年	年度	自己肯定感	自己有用感	教師の関わり	家の人の関わり
		自分には、よいところがあると思う	自分はクラスの人の役に立っていると思う	先生は学習のことについてほめてくれる	家の人は、あなたがほめてもらいたいことをほめてくれる
小学校 第4学年	R7	84.6	68.0	88.9	87.7
	H26	79.5	53.0	80.8	80.3
	差 R7-H26	5.1	15.0	8.1	7.4
小学校 第5学年	R7	83.2	65.2	89.2	87.6
	H26	79.1	51.4	80.8	81.2
	差 R7-H26	4.1	13.8	8.4	6.4
中学校 第2学年	R7	80.3	65.8	84.0	80.8
	H26	73.8	51.0	67.6	68.3
	差 R7-H26	6.5	14.8	16.4	12.5

とちぎっ子学習状況調査【児童生徒質問調査】

## (2) 取組の課題

- 平成28年度からの全国学力・学習状況調査の調査結果の推移を見ると、小・中学校ともに全体的には右肩上がりの傾向が見られるが、ここ数年は、ほぼ横ばいとなっており、現状として「栃木県教育振興基本計画2025—とちぎ教育ビジョン—」の推進指標の達成には至っていない。

推進指標	現状値(2024)	目標値(2025)
「全国学力・学習状況調査」の「教科に関する調査」の各教科(国語、算数・数学、理科、英語)の標準化得点の平均値(理科と英語は3年に1度程度実施)	小6(国語、算数)100.0 中3(国語、数学)100.0 ※2025年は国の公表方法に変更があったためなし	各教科の標準化得点の平均値が、全国平均(100.0)を上回る

栃木県教育振興基本計画2025—とちぎ教育ビジョン—

- 各学校では、調査結果から見いだした思考力、判断力、表現力等の育成といった各教科の課題や記述式の問題等、県全体で課題解決に取り組んできたにもかかわらず、例年、同様の傾向<sup>※4</sup>が見られるなど、依然として解決されていない状況も見られる。

観点/ 解答形式	小学校4年			小学校5年			中学校2年				
	国語	算数	理科	国語	算数	理科	国語	社会	数学	理科	英語
知・技	76.5	56.2	70.9	65.9	62.1	65.3	60.1	48.2	52.5	47.6	50.2
思判表	63.1	53.8	67.1	65.5	68.7	57.4	60.8	54.4	34.1	45.6	42.1
選択	73.4	53.4	68.9	68.4	74.4	59.6	69.9	50.7	52.7	46.6	57.9
短答	66.0	58.7	72.0	71.9	59.7	77.1	60.8	23.3	45.2	50.5	45.2
記述	58.6	38.7	42.7	56.3	66.4	43.4	45.6	53.6	33.8	33.7	31.9

令和7(2025)年度とちぎっ子学習状況調査 各教科の正答率

※4 実施年度により多少の違いはあるものの、例年、同様の傾向にある。詳細は、各年度の「とちぎっ子学習状況調査 報告書」を参照。

- 調査結果等を基にした学力向上に向けた検証改善サイクルの構築・運用については、「調査結果分析」や「プラン作成」などの計画 (Plan) の段階や、「レポート作成」の検証 (Check) の段階が充実してきているのに対し、「進捗状況確認」の実践 (Do) の段階が相対的に落ち込んでいることが分かる。(p.4 参照)
- 平成 26 年度と令和 7 年度の児童生徒質問調査における、学ぶ意欲等に関連する 6 つの質問の肯定的回答の割合を比べると、微増した項目も見られるが、低下した項目が多い。また、「学習は、将来のために大切だと思いますか。」の質問に対しても、調査対象の 5 教科では、ほとんどの学年・教科において低下している。

○ 学ぶ意欲等に関わる内容について、平成 26 年度と令和 7 年度の比較

「次のことは、あなたにどれくらいあてはまりますか。」の質問に対し、「はい」または「どちらかといえば、はい」と肯定的に回答した割合 (%)

学年	年度	勉強していて、 おもしろい、楽 しいと思うこと がある	勉強していて、 「不思議だな」 「なぜだろう」 と感ずることが ある	難しい問題に であうと、より やる気が出る	できるだけ自 分一人の力で 課題を解決し ようとしている	学習に対して、 自分から進ん で取り組んで いる	ものごとを最 後までやりとげ て、うれし かつたことがある
小学校 第4学年	R7	83.5	82.3	57.4	83.2	74.6	92.6
	H26	83.5	81.8	57.1	82.2	70.1	92.1
	差 R7-H26	±0	0.5	0.3	1.0	4.5	0.5
小学校 第5学年	R7	81.6	83.8	52.3	81.8	73.9	93.4
	H26	83.9	84.5	53.5	83.3	71.7	94.0
	差 R7-H26	-2.3	-0.7	-1.2	-1.5	2.2	-0.6
中学校 第2学年	R7	73.3	82.3	37.2	75.1	62.1	94.3
	H26	74.9	79.8	37.7	76.8	65.9	95.0
	差 R7-H26	-1.6	2.5	-0.5	-1.7	-3.8	-0.7

○ 「次の学習は、将来のために大切だと思いますか。」の質問に対し、「はい」と回答した割合 (%) の平成 26 年度と令和 7 年度の比較

学年	年度	国語	社会	算数・数学	理科	英語
小学校 第4学年	R7	70.1	75.8	78.8	65.6	/
	H26	75.9	78.7	82.8	67.4	
	差 R7-H26	-5.8	-2.9	-4.0	-1.8	
小学校 第5学年	R7	72.2	74.2	79.3	59.6	
	H26	79.8	82.3	85.2	62.4	
	差 R7-H26	-7.6	-8.1	-5.9	-2.8	
中学校 第2学年	R7	67.0	46.4	58.5	37.0	62.6
	H26	78.1	49.9	67.2	35.7	66.8
	差 R7-H26	-11.1	-3.5	-8.7	1.3	-4.2

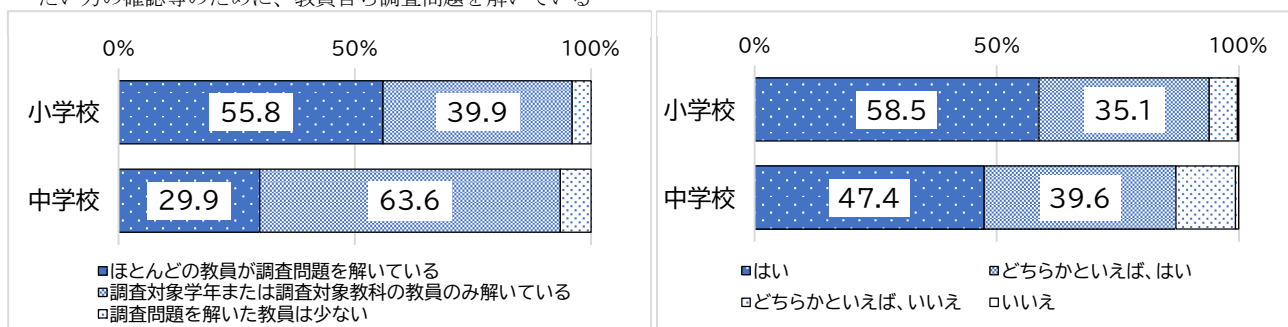
とちぎっ子学習状況調査【児童生徒質問調査】

### (3) 課題解決に向けて

- これまでのプロジェクトの推進により、各学校における学力向上に向けた検証改善サイクルに基づく取組は、年々充実しているが、更なる学力向上を図るためには、教科や学年を越えて授業づくりを行ったり、組織として学力向上に向けた取組を進めたりすることが重要である。小学校においては、学力向上推進リーダーの支援等により、これらの取組が充実してきており、中学校においても、管理職のリーダーシップのもと、推進リーダーや学習指導主任等を中心に組織的な取組の充実を図ることが望まれる。

○ とちぎっ子学習状況調査実施後、児童生徒に身に付けさせたい力の確認等のために、教員自ら調査問題を解いている

○ 教職員間で、互いの授業を見せ合っている



令和7（2025）年度とちぎっ子学習状況調査【学校質問調査】

- 当該学年における学習内容の確実な定着を図るとともに、系統性を踏まえながら指導に当たるなど、義務教育9年間の学びの連続性を重視する必要がある。例えば、前学年の学習内容に課題がある児童生徒には、個に応じた指導を充実させることが求められる。
- 県版学力調査の制度設計を見直し、調査結果を各学校に早く提供したり、分析をする際により有効な資料を提供したりすることで、課題解決のための授業改善の取組の充実を図っていく必要がある。

## 2 とちぎっ子学習状況調査について

### (1) 事業の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

### (2) 事業の内容

#### ① 児童生徒に対する調査

##### ア 教科に関する調査

- 調査対象：小学校第4・5学年 義務教育学校第4・5学年  
特別支援学校小学部第4・5学年（国語、算数、理科）  
中学校第2学年 義務教育学校第8学年 県立中学校第2学年  
特別支援学校中学部第2学年（国語、社会、数学、理科、英語）
- 出題範囲：調査する学年の前学年までの学習内容
- 出題内容：学習指導要領に基づき、教科の目標及び内容に即した知識及び技能、思考力、判断力、表現力等に関わる内容

## イ 質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等に関する質問調査（児童生徒質問調査）

### ② 学校に対する調査

- ・ 学校における指導に関する取組や学習環境等に関する質問調査（学校質問調査）

※ 学校質問調査は令和5年度から、児童生徒質問調査は令和6年度から、ICT端末を用いたオンライン方式で実施

## (3) これまでの取組と実施状況

### ① 実施状況

全国学力・学習状況調査と同一日に実施してきた。平成26年度から令和7年度まで、12回実施した。

※ 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に関する対応のため、県内一斉での同一日での実施ではなく、希望校のみ実施した。

### ② 調査結果の活用

県内の児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析するとともに、市町教育委員会と連携・協力して各学校における検証改善サイクルの確実な運用を支援してきた。

【参考】調査結果提供（児童生徒：個人票、各学校及び市町教育委員会：帳票）（6月下旬）、  
復習・発展用教材提供（6月下旬）、とちぎっ子学習状況調査報告書提供（8月下旬）

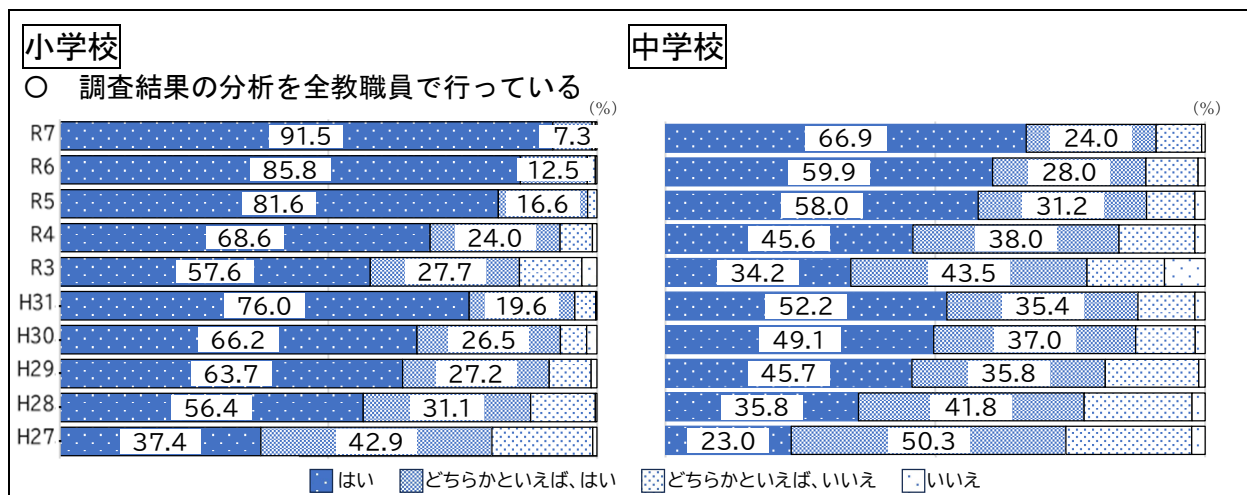
### ③ 調査問題作成に当たって

過年度に出題した問題の結果等を参考にしながら、学習指導要領の内容を具現化した問題や日常生活との関連を図った問題を作成し出題することにより、日々の授業の改善・充実に生かすことができるよう工夫してきた。

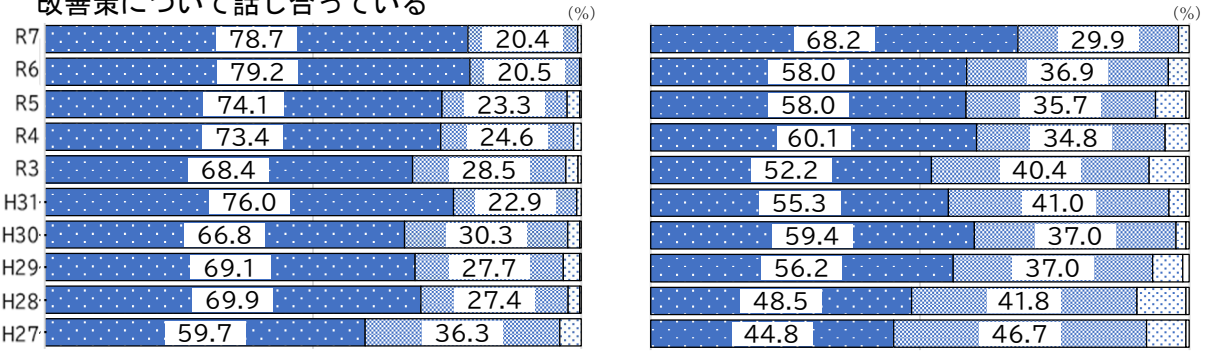
また、本県全体の課題解決を図るために、それぞれの学年・教科ともに課題を踏まえた問題も作成してきた。（問題例はp.22以降を参照）

## (4) 取組の成果

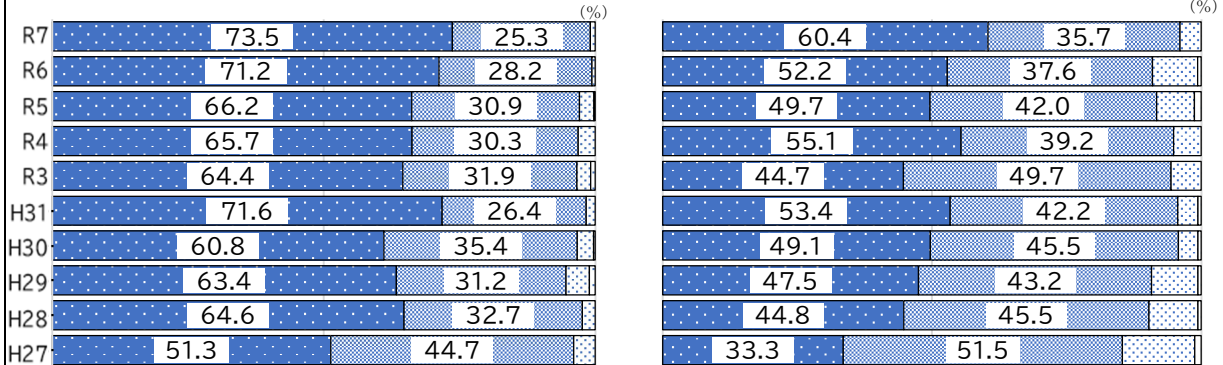
- ・ 市町における独自の学力向上計画に基づく取組や、学校における調査結果に基づく課題解決に向けた取組など、学力調査結果等を活用した検証改善サイクルの構築・運用が図られてきた。



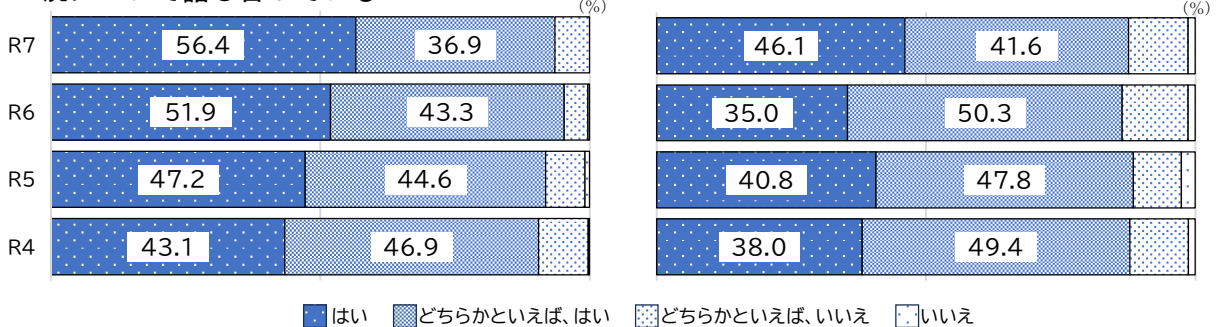
○ 学力向上改善プランの内容の作成に当たっては、学力向上担当者を中心に、教員間で課題や改善策について話し合っている



○ 学力向上改善レポートの内容の作成に当たっては、学力向上担当者を中心に、教員間で課題の解決状況や改善策について話し合っている



○ 職員会議や学年会、教科部会等の機会に、学力向上改善プランを踏まえた課題解決の進捗状況について話し合っている



■ はい ■ どちらかといえば、はい ■ どちらかといえば、いいえ ■ いいえ

とちぎっ子学習状況調査【学校質問調査】

- とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査と併せて独自の学力調査等を実施するなど、各種学力調査を関連させることで学力向上に向けた取組の充実を図る市町が増えてきた。

○ とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査と関連させて、独自の学力調査を実施している市町が14ある。そのうち、年2回実施している市町もある。(令和8(2026)年2月現在)

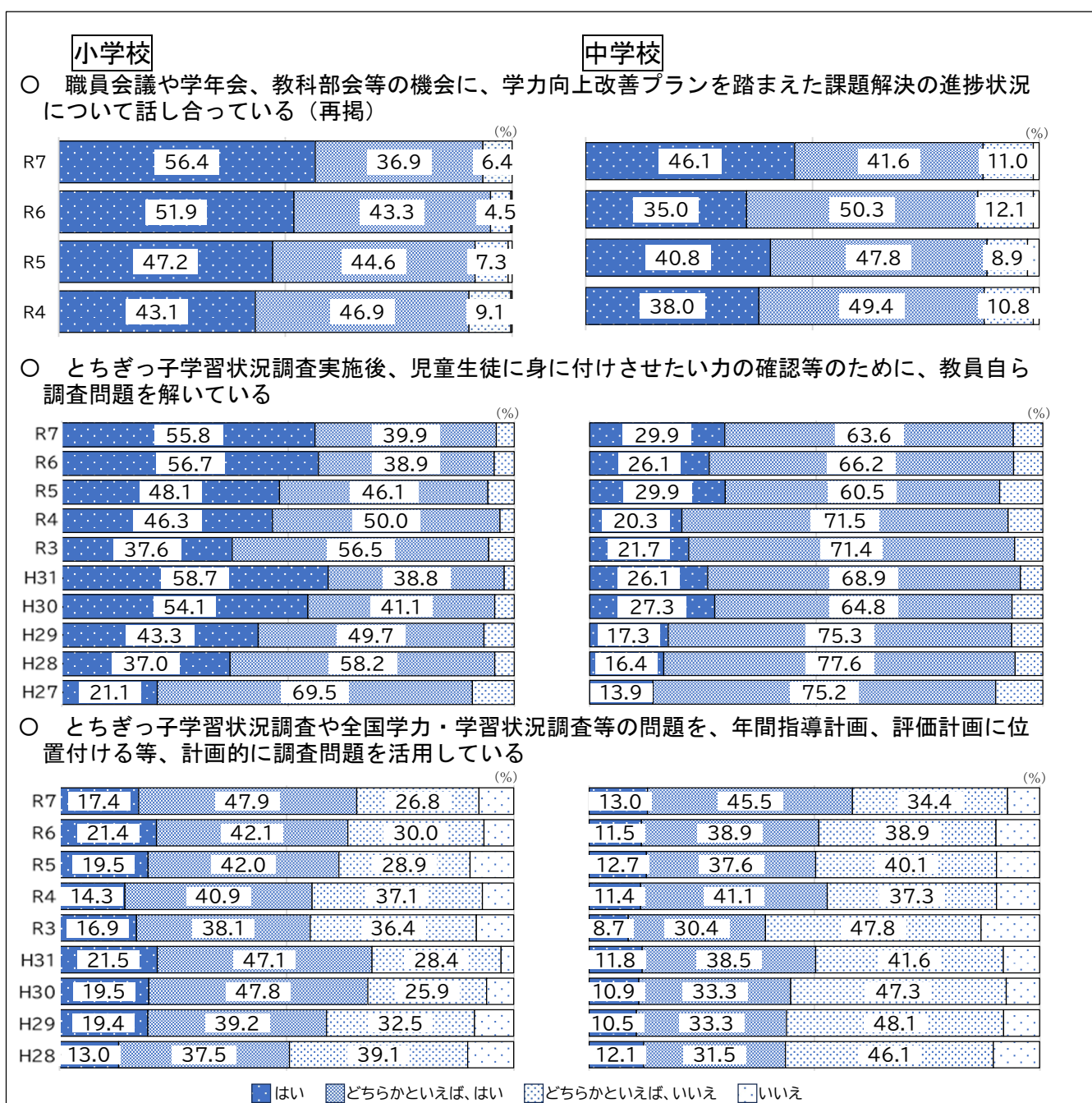
独自調査の時期	4月	5月	11月	12月	1月
市町数(小学校)	2	1	2	12	1
市町数(中学校)	2	1	2	14	1

- 4月実施の市町は、小学校3年生や中学校1年生等を対象に実施している。
- 11月以降に調査を行っている市町は、取組の検証として調査を実施し、年度末に向けて学習の補充を行っている。
- 全ての市町(一部は学校単位)で、学習支援アプリ等の教材を導入し、主に基礎・基本の定着を図っている。(令和6(2024)年9月現在)

- 各種研修会等の機会に、結果や調査問題を踏まえた課題、及びその課題を解決するための授業改善の手立てを伝えることにより、市町や学校においては、学力調査に基づいた取組の充実が図られてきた。

(5) 取組の課題

- 学力調査結果等を活用した検証改善サイクルの構築が定着しつつある一方で、取組の進捗状況の確認や、「教員自ら調査問題を解く」などの課題解決に向けた具体的な実践など、学校間、教師間において取組の差が見られる。そのため、より実効性のある取組を行い、検証改善サイクルを円滑に運用していくための支援を行っていく必要がある。
- 調査問題の計画的な活用が十分でない状況が見られる。学力調査問題は、学習指導要領の内容を具現化したものであるため、その趣旨について周知を図るとともに、年間指導計画や評価計画等に位置付けることで、計画的かつ効果的に活用できるようにする必要がある。



## (6) 課題解決に向けて

- ・ 調査実施後、できるだけ早い時期に調査結果を返却することにより、一人一人の強みと課題を把握し、結果を即座に授業改善に生かすことができる。このように、小まめなPDCAサイクルを回していくことにより、学力向上に向けた取組を充実させる必要がある。
- ・ 全国学力・学習状況調査との関連を図りながら、県版調査においても本県の課題を解決するために有効な調査問題を作成していく必要がある。

## 3 県教育委員会の主な支援について

### ○ 教師の指導力

#### (1) 各種派遣事業

##### ① 学力向上アドバイザー派遣事業【平成 26～28 年度】

- i) 目的： 学習指導及び学校組織マネジメント等について豊富な知識と経験を有する学力向上アドバイザーを全公立小・中学校に派遣し、とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や、学習指導における検証改善サイクルの構築・運用が促進されるよう各学校への支援を行うことで、児童生徒一人一人の学力向上を図る。
- ii) 派遣校数： 平成 26 年度 小学校：126 校 中学校：52 校  
平成 27 年度 小学校：125 校 中学校：54 校  
平成 28 年度 小学校：124 校 中学校：55 校
- iii) 派遣対象： 県内全公立小学校 375 校、中学校 161 校
- iv) 主な成果： 全ての小・中学校への派遣により、各学校における検証改善サイクルの構築・運用が図られ、教員の学力向上に向けての意識が高まった。
- v) 主な課題： 実質的な授業改善という点では、まだ十分でないため、重点的に取り組んでいく必要がある。

##### ② とちぎっ子学力向上応援団派遣事業【平成 29～30 年度】

- i) 目的： 学習指導に豊富な知識と経験を有する学力向上専門員を学習指導の課題解決に向けて意欲的に取り組む学校に派遣し、市町教育委員会と連携しながら、課題解決に向けた取組を支援することで、教師の指導力の向上を図る。
- ii) 派遣校数： 平成 29 年度 小学校：121 校 中学校：55 校 義務教育学校：1 校  
平成 30 年度 小学校：118 校 中学校：58 校 義務教育学校：1 校
- iii) 派遣対象： 全 25 市町内の約 3 分の 1 の小・中学校
- iv) 主な成果： 2 年間継続して同一校を支援し、「応援団」という言葉どおり、教員の授業改善に向けた意欲を高めた。
- v) 主な課題： 本事業では、各年度、一律 5 回ずつ学校訪問を行ったが、市町や学校の背景や抱えている課題は異なっており、それぞれの実態に応じて支援する必要がある。

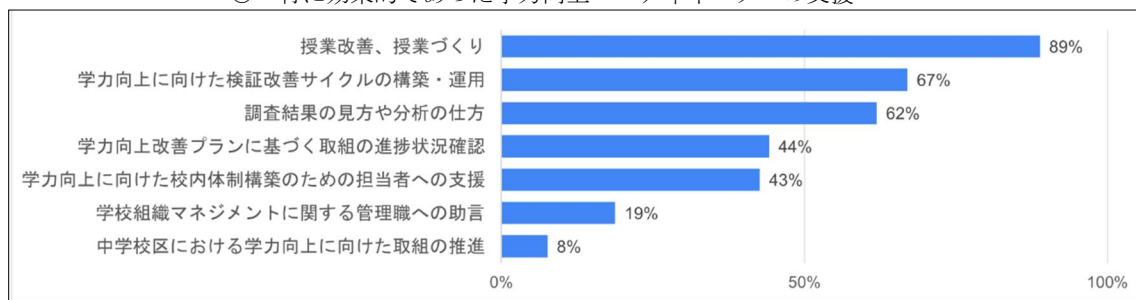
③ 学力向上指導員派遣事業【平成31（令和元）～令和2年度】

- i) 目的： 学校組織マネジメントや学習指導に豊富な知識と経験を有する学力向上指導員を、学習指導上の課題解決に向けて意欲的な市町に派遣し、課題解決に向けた市町教育委員会や学校の取組を支援することにより、本県全体の学力の向上を図る。
- ii) 派遣校数： 平成31年度 小学校：81校 中学校：35校  
令和2年度 小学校：68校 中学校：29校
- iii) 派遣対象： 11市町内における市町が指定した地区内の小・中学校
- iv) 主な成果： 学校の取組の支援と併せて、市町主催の研修会への支援、更に推進地区内の取組の好事例などを派遣市町全体に普及・啓発することができた。
- v) 主な課題： これまでの派遣事業等により、課題が解決されてきた市町や学校がある一方で、解決されていない市町に対して、重点的に支援する必要がある。併せて、新たにICTの効果的な活用に対しても支援を行う必要がある。

④ 学力向上コーディネーター派遣事業【令和3～7年度】

- i) 目的： 学力定着に課題を抱える市町に学力向上コーディネーターを派遣し、市町における学力向上に向けた取組や、学校における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けた取組を支援することにより、学力の向上を図る。
- ii) 派遣校数： 令和3年度 小学校：98校 中学校：46校 義務教育学校：2校  
令和4年度 小学校：108校 中学校：47校 義務教育学校：3校  
令和5年度 小学校：99校 中学校：53校 義務教育学校：2校  
令和6年度 小学校：88校 中学校：60校 義務教育学校：5校  
令和7年度 小学校：129校 中学校：61校 義務教育学校：5校
- iii) 派遣対象： 18市町内における小・中学校
- iv) 主な成果： 市町や学校の実態を踏まえて、それぞれの求めに応じた支援を行っている。派遣校においては、特に、授業づくり・授業改善の取組の充実が図られている。
- v) 主な課題： 教科や学年を越え、組織的に授業改善に取り組むことが必要である。

○ 特に効果的であった学力向上コーディネーターの支援



派遣校の管理職を対象としたアンケート調査結果（R7）

⑤ 派遣事業全体の主な成果

- i) 学校訪問の際、授業参観後の授業者への直接的な支援や、授業研究会における講話や助言による教員全体への支援を行ってきたことにより、学校全体の授業改善が図られてきた。

ii) 調査結果の分析の仕方や、調査結果から見いだした課題を学校全体で組織的に解決していくことについて、計画的な訪問で継続して支援してきた。各学校において、学力調査を要とする検証改善サイクルの構築・運用が図られてきた。

iii) 市町教育委員会の学力向上に係る計画等を踏まえ、各学校の実状に応じた支援を行うことで、各市町における学力向上に向けた取組の充実が図られるとともに、市町が、学力向上計画に基づく独自の取組を推進するようになった。

例えば、市町教育委員会が学力向上コーディネーターと連携し、調査結果の分析の仕方について説明した動画を作成し、域内全ての学校に展開し、活用を促した事例が見られた。また、計画されている学力向上コーディネーターによる学校訪問とは別に、オンラインで各校の学習指導主任等と学力向上コーディネーターが相談できる機会を設定し、各校の学力向上に向けた取組の進捗状況の確認を行った事例も見られた。

## ⑥ 派遣事業全体の主な課題

i) 継続して派遣を実施している学校と、一定期間派遣を実施していない学校との間で、取組の違いが見られる。派遣学校数には限度があることから、効果的な取組について、派遣校内のみだけでなく、小・中学校間や、市町全体で共有を図っていく必要がある。

ii) これまでの派遣事業による支援等により、市町教育委員会においては、学力向上に向けた独自の取組が推進されてきた。今後は、県教育委員会と市町教育委員会の取組がつながることで、更に実効性が高まるよう支援や助言を行っていく必要がある。

### コラム①

#### 授業改善が促進されている学校の特徴

学力向上コーディネーター派遣事業等から確認できた「授業改善が促進されている学校」に共通する特徴を整理しました。

##### 1 管理職のリーダーシップ

校長がリーダーシップを発揮し、学校の課題を精選し、解決に向けて取り組むと、授業改善が進みやすくなります。

##### 2 ミドルリーダーを中心とした継続的な取組

学習指導主任等を中心に、学力向上改善プランを踏まえた取組の充実を図ったり、進捗状況を定期的に確認したりすることで、自校の課題解決に向けた授業改善につながります。

##### 3 学校の雰囲気、教職員の同僚性

互いに授業を見せ合う文化が浸透している学校は、授業改善が進みやすくなります。

##### 4 家庭との協力

家庭学習の習慣化に向けて、家庭を巻き込んだ課題を出すなどの取組が効果的です。

## (2) 学力向上推進リーダー配置事業

### ① 事業の目的

学習指導に実績のある教員を、「学力向上推進リーダー」(以下、推進リーダー)に認定し、教員の指導力向上に向けた支援を可能とすることにより、配置校の学力向上に資する。

## ② 事業の内容

推進リーダーは、各市町教育委員会が作成した「学力向上推進リーダー活用計画」に則り、複数の学校を兼務し、本務校や兼務校においてティーム・ティーチングによる授業や教員への個別助言、校内研修等を行うことを通して、学校全体の学力向上を目指す。

### 【リーダーの業務内容】

- ・ 授業参観後、授業者に対する個別指導・助言
- ・ T2として担任をサポート
- ・ T1として模範授業を提示
- ・ 指導内容等の記録
- ・ 校内研修での指導・助言 等

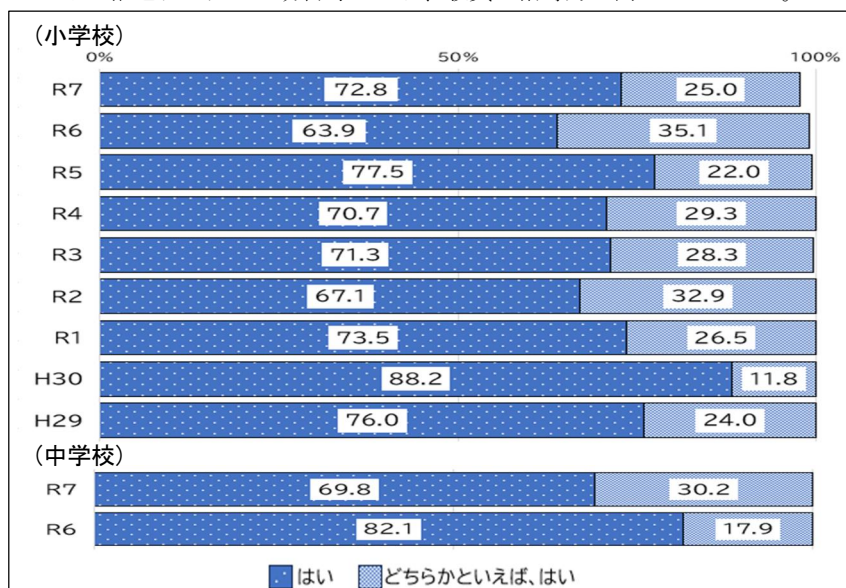
## ② これまでの取組と実施状況

- 小学校では、平成29年度からの9年間で186校、中学校では令和6年度からの2年間で43校に配置してきた。
- 令和7年度は、年間9回の研修会を行い、調査結果分析に基づく授業改善や支援の際の留意点等について共通理解を図るなど、推進リーダーの資質向上を目指してきた。
- 宇都宮大学共同教育学部附属小・中学校や、リーダー配置校において、授業参観及び協議を行うなど、実践的な研修を通して、支援の際の手立てを共有してきた。
- 推進リーダーが、市町教育委員会指導主事及び学力向上コーディネーターと連携を図り、支援の方向性を共有しながら課題解決を図れるよう支援してきた。

## ④ 取組の成果

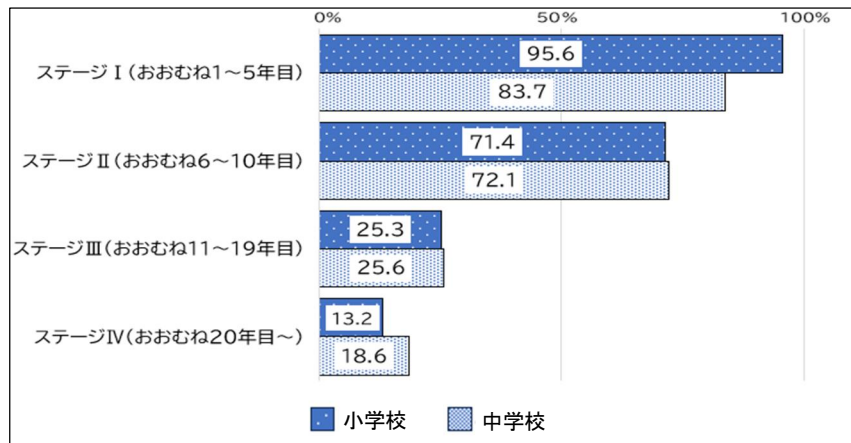
- 推進リーダーの支援により、県教育委員会が示している授業改善の視点を踏まえた授業を行うなど、日々の学習指導の充実が図られてきた。特に、若手教員の指導力向上を図る上で大変有効であった。

○ 推進リーダーの助言等により、教員の指導力は向上しましたか。



配置校の管理職を対象としたアンケート調査結果（H29～）

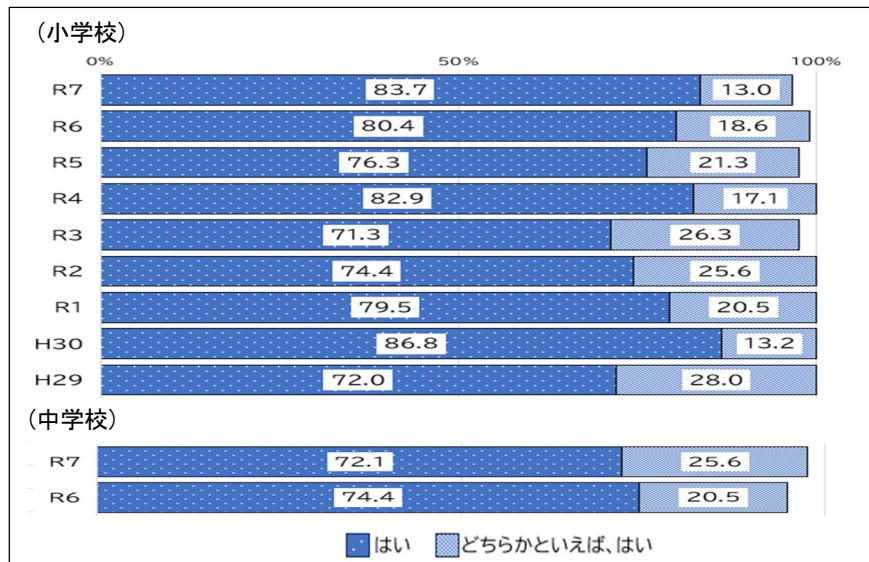
○ 特にどのステージの教員の指導力が向上したと思いますか。



配置校の管理職を対象としたアンケート調査結果 (R7)

ii) 推進リーダーが、校内研修等の機会に県教育委員会作成の指導資料や他校の取組の好事例を紹介することにより、学校全体の取組が充実してきた。

○ 推進リーダーの支援を通して、学校全体の学力向上に向けた取組の充実を図ることができましたか。



配置校の管理職を対象としたアンケート調査結果 (H29～)

iii) 授業づくりの段階や授業中の支援、授業後の振り返りの支援等を継続的に行うことにより、授業改善に向けた教員の意欲が高まってきた。

## ⑤ 取組の課題

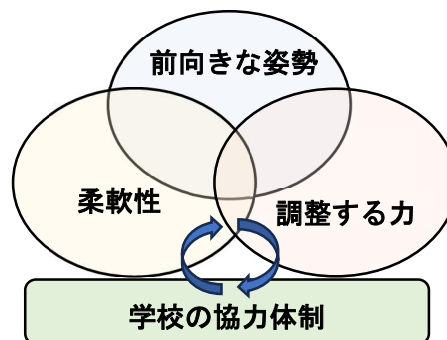
- i) 推進リーダーの支援は大変効果的であり、市町教育委員会や学校からは増員や訪問回数増加を求める要望があるが、十分に答えることができていない。
- ii) 推進リーダーに適切な人材を確保するために、市町教育委員会は、年齢構成や実績等を慎重に考慮した上で人選を行う必要がある。
- iii) 小学校における取組を参考に、中学校においても授業改善を進めていく必要がある。特に、教科や学年の枠を越えた授業づくりや授業研究会を充実させるなど、学校全体の取組を進めていく必要がある。

### 指導力が向上した教員に共通する特徴

学力向上推進リーダー配置事業から確認できた「指導力が向上した教員」に共通する特徴を整理しました。

- 1 児童生徒の学力向上のために、自らの指導力を向上させたいという前向きな姿勢がある。
- 2 助言等を的確に理解し、新しい指導方法等に取り組もうとする柔軟性がある。
- 3 自らの授業を振り返って課題を見出し、改善しようとする調整する力がある。

なお、上記3つの特徴は、学校全体で授業改善に取り組もうとする同僚性や協力体制が土台となり醸成されるとともに、その同僚性や協力体制をより強固なものにするといった、相互に影響を与え合う関係にあると考えられます。



### (3) 学力調査結果活用研修会

#### ① 内容

とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の調査結果を踏まえた学習指導の改善に関する説明や講話等を通して、各学校の学力向上に関する取組の改善・充実を図る。

#### ② これまでの取組の実施状況

- ・ 平成27年度から、全公立小・中学校の学習指導主任を対象に実施
- ・ 令和2年度からは、8月に期間を設け、ウェブサイトから動画を配信

#### ③ 取組の成果

参集型から動画を視聴する形態の研修に変更したことで、時間を調整して参加したり、繰り返し動画を視聴したりすることができるようになり、教員にとって活用しやすい研修会となった。

#### ④ 取組の課題

令和7年度に、研修動画を校内研修等で活用している学校は、38.2%である。学習指導主任だけでなく、多くの教員にとって有効な研修となるよう、内容や方法について検討する必要がある。

### (4) 指導資料

#### ① 内容

全国学力・学習状況調査の調査結果から見られる本県の特徴や指導のポイントをまとめたリーフレット「とちぎの子ども『確かな学力』向上のために」を作成・配布し、各学校の主体的な取組の促進を図ってきた。

また、学力向上通信を作成・配布することで、各学校における検証改善サイクルの確実な運用に向けて有効な情報を提供してきた。

## ② これまでの取組の実施状況

- ・ とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために  
平成 27 年度から、県内全公立小・中学校や市町教育委員会等に向けて配布した。県のホームページ及び「学力向上アーカイブ」ウェブサイトにも電子データを掲載した。
- ・ 学力向上通信  
平成 29 年度から、年間数号ずつ作成・配布した。令和 5 年度は、平成 29 年度から発行してきた学力向上通信バックナンバーを内容ごとに整理し、県のホームページ及び「学力向上アーカイブ」ウェブサイトに掲載した。

## ③ 取組の成果

授業改善に向けた具体例を掲載することで、検証改善サイクルを効果的に運用するための参考となった。

## ④ 取組の課題

多くの学校で指導資料を活用しているが、一人一人の教員が十分に活用できていない状況も見られる。指導資料の活用場面や方法、使い方の説明等の支援を行ったり、自校の取組についての記入欄を設けたりするなど、教員が主体的に活用できるよう工夫していく必要がある。

## ○ 子どもの学ぶ意欲・学習習慣

### ・ パワーアップシート

#### ① 内容

これまでの全国学力・学習状況調査や、令和 5 年度からとちぎっ子学習状況調査の問題に解答欄や正答例等を追加するなど、学校で活用しやすいよう編集したシートを作成・提供してきた。調査結果返却後、調査対象学年の児童生徒が授業中に解き直したり、下学年の児童生徒が学習内容の定着を確認したりできるよう工夫した。

#### ② これまでの取組の実施状況

平成 26 年度から、学力向上推進担当のウェブサイトに各年度のパワーアップシートの電子データを掲載してきた。

#### ③ 取組の成果

- i) パワーアップシートを、栃木県総合教育センター及び「学力向上アーカイブ」ウェブサイトに掲載することで、より活用しやすくなった。
- ii) 令和 5 年度から、全国学力・学習状況調査のパワーアップシートに加え、とちぎっ子学習状況調査のパワーアップシートも作成し、授業改善にも活用できるようになった。

#### ④ 取組の課題

- i) パワーアップシートの十分な活用が図られるよう、活用方法等を周知する必要がある。
- ii) 令和4年度以前のとちぎっ子学習状況調査のパワーアップシートの作成についても検討し、随時提供していく必要がある。

### ○ 保護者の理解・協力

#### ・ 保護者啓発資料の作成・配布

##### ① 内容

児童生徒の主体的な学びの確立に向け、保護者の理解と協力を促すために、学力向上に関する資料（動画）を作成・配布（配信）する。

##### ② これまでの取組の実施状況

- ・ 平成26年度から、調査実施の4月に併せ、とちぎっ子学習状況調査対象学年の保護者に対して紙面で配布してきた。
- ・ 平成26年度から令和2年度までは、「学力を伸ばす7つの習慣」をテーマに、令和3年度からは、「子どものよさを家庭で認める」内容をテーマに作成してきた。
- ・ 令和4年度から、保護者向け動画を作成・配信してきた。
- ・ 令和5年度からは、4月の配布に加え、夏休み前の7月及び年度末の2月にも配布し、家庭での関わり方を啓発してきた。また、紙面での配布のみならず、電子データをウェブサイトに掲載するなど、調査対象学年以外の保護者にも周知してきた。

内容については、子どものよさを認める具体的な声かけの例の他、計画的に学習に取り組むよさや、テレビゲームの時間と調査結果との関連等についても取り上げ、啓発してきた。

また、調査対象学年の保護者に対しては、タブレット端末等での復習・発展用教材の活用を呼びかけ、家庭学習の充実を図ってきた。

##### ③ 取組の成果

- i) リーフレットと併せて動画も配信し、保護者の支援や協力の大切さを啓発したことで、保護者が学力向上について考えるよい機会となった。
- ii) 児童生徒がほめてもらいたいことをほめるなどの家庭での関わりについて、継続して啓発してきたため、家庭における前向きな声かけや関わりの参考となった。（p.5 参照）

##### ④ 取組の課題

- i) 保護者の理解・協力を促すために、時期に合う内容を整理し、提供する。
- ii) 学力向上の取組が、確実に保護者に届くよう、周知方法等を工夫する。
- iii) 家庭での関わりなどについて、保護者の声を直接聞くことができていない。
- iv) 家庭での関わりと児童生徒の学力との関連について、根拠を得ることができていない。

## 4 今後の取組に向けて

これまでの「とちぎっ子学力アッププロジェクト」の成果と課題を整理すると、以下のとおりである。

### ※【成果（○）】【課題（△）】

#### 1 プロジェクト全体を通して

- 全国学力・学習状況調査においては、小学校、中学校ともに全ての教科で全国と同程度の学力を維持している。
- 各学校においては、各種学力調査結果等から自校の強みと課題を見だし、組織的に学力向上に向けて課題解決を図る検証改善サイクルの構築が図られてきた。
- △ 「知識及び技能」に比べ、「思考力、判断力、表現力等」を十分に育成できていない。また、学年が上がるにつれて学力が二極化する傾向にある。
- △ 学校間、教師間において取組の差が見られるため、小まめにサイクルを回すなど、これまで以上に実効性のある取組を行う必要がある。
- △ 調査実施後、できるだけ早い時期に調査結果を返却することで、課題解決に向けて取り組む期間を確保し、授業改善を充実させる必要がある。

#### 2 子どもの学ぶ意欲・学習習慣

- 児童生徒の自己肯定感や自己有用感の高まりが見られる。
- △ 学習意欲について、大きな変容が見られない。一部の教科では、学習意欲の低下が見られる。

#### 3 教師の指導力

- 学力向上コーディネーター派遣事業、学力向上推進リーダー配置事業の活用が定着し、各学校における授業改善が図られている。
- 市町教育委員会がとちぎっ子学力アッププロジェクトと市町独自の取組を関連付け、各学校の組織的な取組を活性化し支援している。
- △ 調査結果を踏まえた検証改善サイクルの構築・運用については、年間1回の大きなサイクルを回す取組が形骸化している。
- △ 更なる学力向上を図るためには、教科や学年を越えて授業づくりを行うなど、組織的に学力向上に取り組むことが重要である。

#### 4 保護者の理解・協力

- 子どもをほめ、よさを認める声かけをしている家庭が増えている。
- △ 家で計画的に学習に取り組むなど、家庭学習の充実が必要である。

全国学力・学習状況調査においては、令和5年度の中学校英語（「話すこと」）、令和7年度の中学校理科、令和8年度の中学校英語に続き、令和9年度からはC B T（Computer Based Testing）による全面実施が決定している。

また、次期学習指導要領に向けた論議の中では、探究的な学びの基盤としての情報活用能力の抜本的向上が求められており、小学校段階から総合的な学習の時間に「情報の領域（仮称）」の導入や、中学校段階における指導の充実などが検討されている。

今年度の検証委員会においては、学校間の学力差の解消に向けた取組が必要であることや、児童生徒が学習することに意義を見出すことに課題があることなどが確認された。さらに、学習指導要領では、児童生徒の「学びに向かう力、人間性等」の涵養が求められている一方、近年、児童生徒の家庭学習時間が減少傾向にある<sup>※5</sup>ことを踏まえると、家庭学習の充実に向けた保護者への働きかけも必要であることが考えられる。

以上のことを踏まえ、今後の取組に向けて、以下の点について充実を図り、更に取組を推進していくことが重要である。

- 管理職の力強いリーダーシップのもと、学習指導主任等を中心に、各学校の組織的な取組の充実を図ること。
- 確かな学力の定着のため、教員は小まめに児童生徒の学習状況を把握し、授業改善を図るとともに、児童生徒の学習改善を促すこと。
- 思考力、判断力、表現力等の資質・能力を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることができるよう支援すること。
- 各学校の主体的な取組を支援するとともに、好事例を広く周知すること。
- 保護者への啓発方法等についても見直し、家庭学習の充実を図ること。

※5 全国学力・学習状況調査における児童生徒質問調査結果から、学校の授業時間以外の勉強時間は、小・中学生とも令和3年度以降、平日、休日のいずれも減少傾向にあり、栃木県も同様の傾向にある。

## IV おわりに

「とちぎっ子学力アッププロジェクト」は、令和7年度で12年目を迎えた。本年度は3回の委員会を通して、県全体の学力向上に向けた取組についての検証を行った。協議においては、各委員からこれまでの取組を高く評価する声に加え、各学校における学力向上に向けた取組の好事例を積極的に発信していくことや、これまで以上に学校や家庭と連携を図ることなど、更なる取組の充実を望む意見が出された。特に、とちぎっ子学習状況調査については、各学校や市町教育委員会において、学力向上に向けた検証改善サイクルの根幹となっていること、また、授業だけでなく、各種研修会等において調査問題や結果が活用されていることが確認できた。さらに、学力向上推進リーダーや学力向上コーディネーターが、各学校における学力向上に向けた検証改善サイクルの構築・運用に大きな役割を果たしていることも確認できた。

とちぎっ子学習状況調査においては、令和5年度からコンピュータを用いて学校質問調査を、令和6年度からGIGAスクール構想により整備された1人1台端末を活用しながら児童生徒質問調査を行ってきた。事務局からは、教科に関する調査の結果に加え、各学校の組織的な取組の状況や、児童生徒の学力と学習状況との相関、学習への興味・関心、主体的に学習に取り組む態度などの変容等が報告された。報告を踏まえると、児童生徒が学ぶことの意味や意義を実感し、見通しをもって粘り強く取り組むなど、主体的に学習に取り組む態度を育む必要があることや、家庭学習の充実を図るための取組が重要であることが再確認された。

今後は、全国学力・学習状況調査のCBT化などの国の動向も注視しつつ、調査の実施方法や内容を見直すなど検討を重ね、これまで以上に児童生徒一人一人に寄り添った支援となるよう、更なる充実を図ってほしい。

各学校においては、「とちぎ学力向上推進事業(とちぎっ子学力アッププロジェクト)-平成26(2014)年度～令和7(2025)年度-12年間の取組のまとめ」を基に、本県児童生徒一人一人の学力向上に向け、次年度以降の県全体の学力向上に向けた取組の改善・充実に努めてほしい。

# 参考資料

## 1 とちぎっ子学習状況調査 問題例

< 中学校国語 >

**アンケート結果**  
日本の伝統的な遊びといえば？

(自由記述・複数回答)

・かるた ……23 票	・折り紙 ……20 票
・けん玉 ……12 票	・竹とんぼ ……10 票
・めんこ ……9 票	・その他 ……8 票

うえの  
上野さん  
(司会)
かじわら  
梶原さん

むらた  
村田さん
なかやま  
中山さん

内容	日本の伝統的な遊び ◎折り紙 ・準備が簡単 ・いろいろな人が楽しめる
発表方法	◎遊びを実際に体験してもらう ◎折り方を図で説明する →フリップと、プリントしたものを見せる ◎完成品を見せる

**1** ある中学校の二年生は、国際交流として、地域の日本語学校で日本語を学んでいる人に向けて、日本文化について発表することになりました。上野さんたちのグループでは、「日本の伝統的な遊び」をテーマに決め、発表内容について話し合っています。次の【話し合いの様子】と、【上野さんが整理したメモ】の内容を確認しなさい。

【話し合いの様子】

【上野さんが整理したメモ】

(1) 梶原さんの話し方に当てはまるものとして、最も適切なものを、次から一つ選びなさい。

- 1 自分も同じ意見であると述べ、新たな提案はせず、前の人の提案を整理して共有していた。
- 2 自分の提案と比較しながら、前の人の提案には同意できる点がないと主張し、反論していた。
- 3 前の人の意見をふまえずに自分の提案を述べて、その提案の長所と短所を説明していた。
- 4 前の人の提案に対して、一部賛成しながらも問題点を指摘し、自分の提案を述べていた。

(2) 話し合いの中で、村田さんが話した内容に当てはまるものとして、最も適切なものを、次から一つ選びなさい。

- 1 伝統的な遊びについて一方的に話すよりも、実際に体験してもらおうがよい。
- 2 日本語を勉強中の人もいるので、なるべく言葉を使わない発表にするほうがよい。
- 3 けん玉は慣れないとあつかいが難しいので、今回の発表では違うものがよい。
- 4 折り紙の折り方には簡単なものや複雑なものがあり、人それぞれ楽しめるのがよい。

(3) 司会の上野さんが行っていた話し合いの進め方の工夫として、最も適切なものを、次から一つ選びなさい。

- 1 話し合いに関係のない私語があったため、指摘して話し合いに戻していた。
- 2 まったく異なる意見の中に共通点を見つけて、意見が対立することを避けていた。
- 3 全員が発言できるように、まだ発言していない人を指名して発言を促していた。
- 4 司会の役割を果たすため、自分の意見や感想は述べずに話し合いを進めていた。

(4) 司会の上野さんは、最後の発言のあとに、発表方法の手順についてまとめようとしています。あなたが上野さんなら、どのように話しますか。次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。

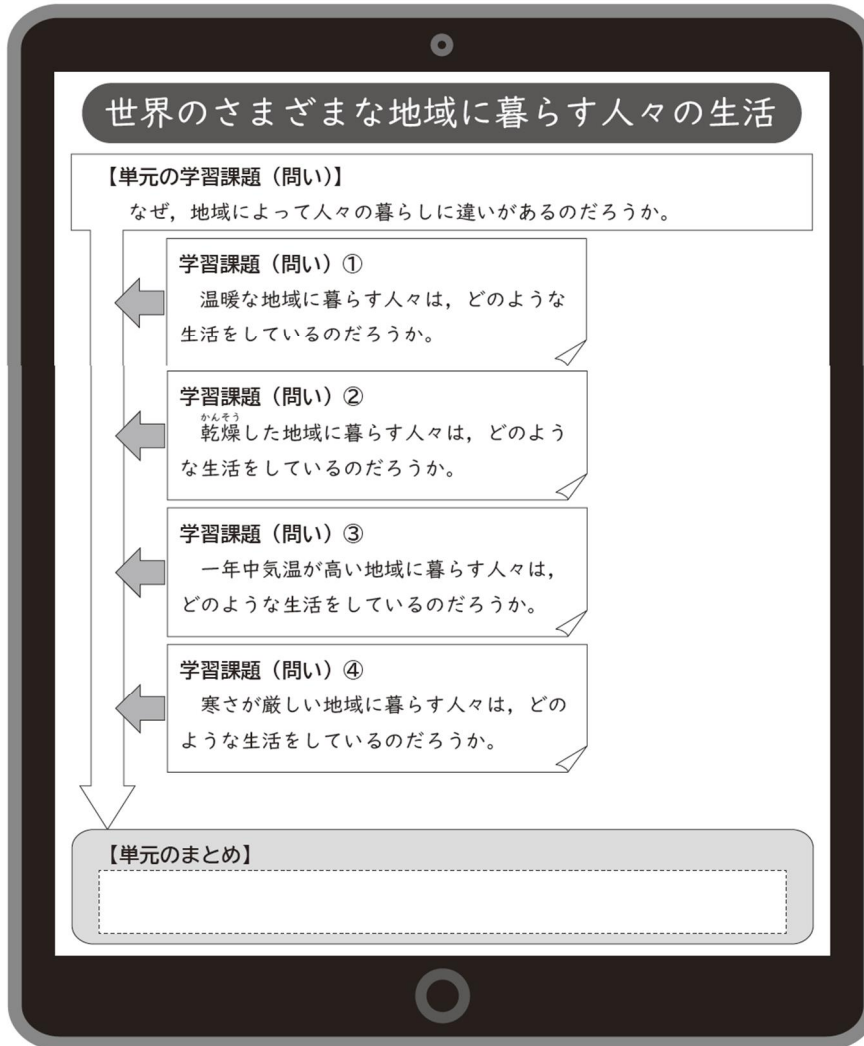
- 条件1 「上野さんが整理したメモ」の内容を参考にして、一つ目の手順の内容を書くこと。
- 条件2 解答欄にある「発表するとき」は、まず初めに、「」にっなけて書くこと。
- 条件3 十五字以上、三十字以内で、実際に話すように書くこと。

(令和7(2025)年とちぎっ子学習調査問題 中学校2年 大問1)

**2** 次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

ひかりさんのクラスでは、世界のさまざまな地域に暮らす人々の生活について学習をするにあたり、「なぜ、地域によって人々の暮らしに違いがあるのだろうか。」という単元を通して解決する学習課題（問い）を立てました。そして、その課題を解決するために、毎時間の授業で調べていくことを示した、次のような単元の学習計画を立てました。

単元の学習計画



- (4) 単元の学習を終えたひかりさんのクラスでは、最初に立てた【単元の学習課題（問い）】に対する【単元のまとめ】を考えています。ひかりさんは、これまでに調べてきた学習課題（問い）①～④に対するまとめの内容をふまえて、【単元のまとめ】を書きました。次のひかりさんのまとめの中の  に当てはまる内容を書きなさい。 ⑨

ひかりさんのまとめ

**世界のさまざまな地域に暮らす人々の生活**

**【単元の学習課題（問い）】**  
 なぜ、地域によって人々の暮らしに違いがあるのだろうか。

<b>学習課題（問い）①</b> 温暖な地域に暮らす人々は、どのような生活をしているのだろうか。	<b>学習課題（問い）①のまとめ</b>
<b>学習課題（問い）②</b> 乾燥した地域に暮らす人々は、どのような生活をしているのだろうか。	<b>学習課題（問い）②のまとめ</b>
<b>学習課題（問い）③</b> 一年中気温が高い地域に暮らす人々は、どのような生活をしているのだろうか。	<b>学習課題（問い）③のまとめ</b>
<b>学習課題（問い）④</b> 寒さが厳しい地域に暮らす人々は、どのような生活をしているのだろうか。	<b>学習課題（問い）④のまとめ</b>

**【単元のまとめ】**  
 世界の各地域の人々の暮らしに違いがあるのは、それぞれの地域に特徴的な気候があるので、そこに住む人々が  からだと考えました。

（令和 7（2025）年とちぎっ子学習調査問題 中学校 2年 大問 2）

14

だいきさんたち4年生は、畑で野菜を育てることになりました。植える野菜を、ほうれん草、トマト、なす、きゅうりの中から2種類決めます。



4年生全員に育てたい野菜のアンケートをとってみよう。

だいきさんとまゆさんは、クラス別のアンケートの結果を、それぞれ下の表にまとめました。

育てたい野菜(1組)

野菜	人数(人)
きゅうり	10
なす	8
ほうれん草	7
トマト	5

育てたい野菜(2組)

野菜	人数(人)
きゅうり	14
トマト	12
なす	4
ほうれん草	2



1組も2組も、きゅうりを選んだ人がいちばん多いよ。



2番目に多い野菜は1組と2組でちがうね。分かりやすいように、1つの表にまとめてみよう。

育てたい野菜(1組と2組) (人)

野菜 \ 組	1組	2組	合計
きゅうり	10	14	24
なす	8	4	12
ほうれん草	7	2	9
トマト	5	12	17
合計	30	32	ア

(1) 上の表の「ア」にあてはまる数を答えましょう。



同じ野菜が横にならんでいて見やすいね。選んだ人数が多いのはきゅうりとトマトだね。



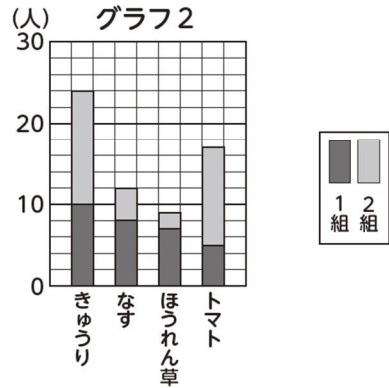
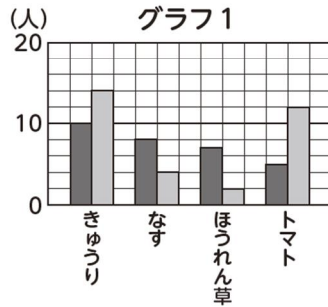
1つの表にまとめると、ほかにもいろいろなことが分かるね。

(2) 上の表から分かることとして正しいものはどれですか。次の1～4から2つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 選んだ人数の合計がいちばん少ない野菜は、ほうれん草である。
- 2 1組と2組のクラスの人数は、同じである。
- 3 なすを選んだ人数は、2組より1組のほうが多い。
- 4 トマトを選んだ人数は、男子より女子のほうが多い。



どの野菜が多いのかを、さらに分かりやすく表すために、表からぼうグラフにしてみたよ。



だいきさんは、まゆさんがかいた上のグラフ1とグラフ2を見て、次のように考えました。

**だいきさんの考え**

まゆさんがかいた2つのグラフをくらべると、  
グラフ2のほうがいいと思います。

そのわけは、グラフ1のぼうよりグラフ2の積み重ねたぼうの  
ほうが  を分かりやすく表しているの  
で、4年生が育てたい野菜がグラフを見てすぐに分かるからです。

(3) だいきさんの考えの  にあてはまる言葉を、次の1～4から1つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 その野菜を選んだ、1組と2組の人数の合計
- 2 その野菜を選んだ、1組と2組の人数の差
- 3 その野菜を選んだ、1組と2組のそれぞれの人数
- 4 野菜の種類

(令和7(2025)年とちぎっ子学習調査問題 小学校4年 大問14)

- 6** まことさんたちは、ねん土の形をかえると重さはどうなるのかきもんに思い、次のような【問題】を解決するために、【じっけん】をすることにしました。

**【問題】**  
ねん土の形をかえると、重さはどうなるのか。

**【じっけん】**  
① ねん土を図1のA～Cのようにいろいろな形にかえる。

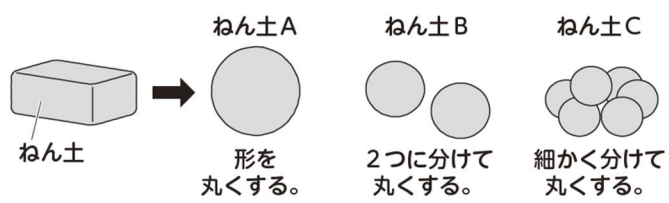


図1

② それぞれの重さを電子てんびんではかる。



ぼくは、ねん土を細かくするほど、軽くなると予想したよ。

- (1) まことさんの予想が正しければ、どのようなけっかになると考えられますか。次の1～4から1つえらんで、その番号を書きましょう。⑤
- 1 ねん土Aは形をかえる前よりも重くなる。
  - 2 ねん土Bは形をかえる前よりも重くなる。
  - 3 ねん土Cは形をかえる前よりも軽くなる。
  - 4 ねん土A～Cの重さは、形をかえる前と同じである。

(令和7(2025)年とちぎっ子学習調査問題 小学校4年 大問6)

< 中学校英語 >

**9** 次の(1)と(2)の対話が成り立つように、下の指示に従って( )に適する英語を書きなさい。 24

- ・(1)は、与えられた語を必要に応じて適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして書きなさい。
- ・(2)は、3語以上の1文で書きなさい。

(1) 〈家で〉

*Tom's mother* : Please \*go shopping and buy some vegetables.

*Tom* : I'm sorry, but I can't. I ( study ) now.

*Tom's mother* : Oh, I see.

(注) \*go shopping 買い物に行く

(令和7 (2025) 年とちぎっ子学習調査問題 中学校2年 大問9)

**11** 日本に興味をもっているイギリスの中学生ジェニー (Jenny) からメッセージが送られてきました。次の英文は、そのメッセージの一部です。ジェニーからのお願いに対して、あなたはどのように返事をしますか。まとまりのある3文以上の英語で書きなさい。 25



I'm \*interested in your \*town.  
I want to know about your favorite place in your town.  
Please \*tell me about it.

(注) \*be interested in ~ ~に興味がある \*town 町 \*tell ~ ~に教える

(令和7 (2025) 年とちぎっ子学習調査問題 中学校2年 大問11)

●保護者用リーフレット vol.2

# 家庭で学カアップできるプロジェクト

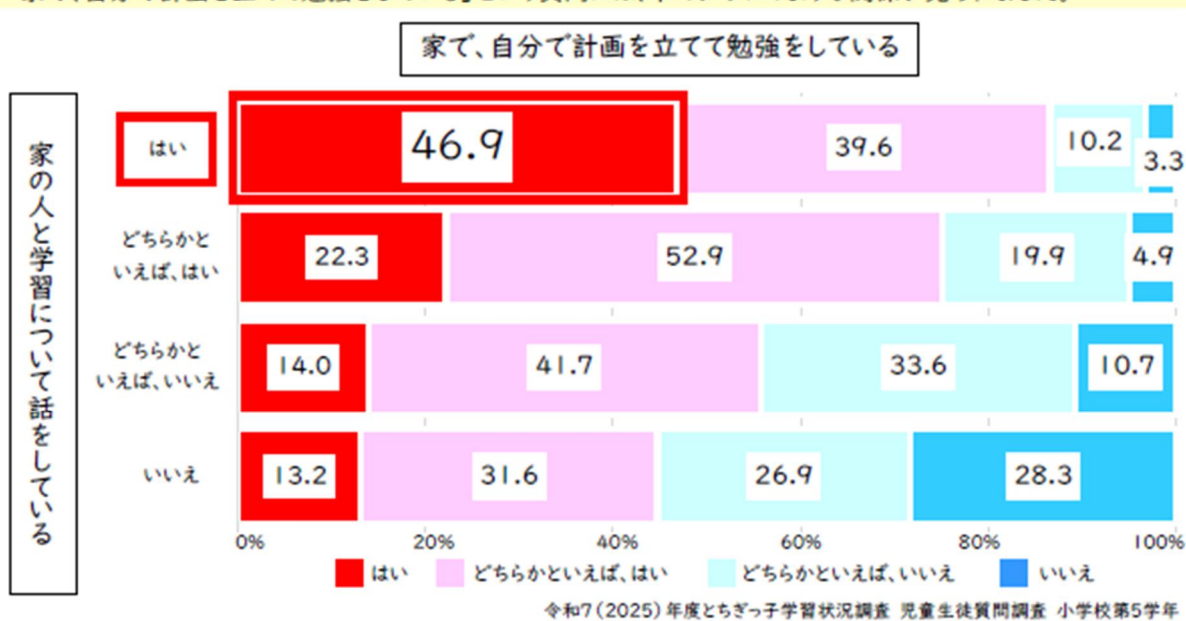
令和7(2025)年7月  
栃木県教育委員会

県教育委員会では、小学校4・5年生、中学校2年生を対象に「とちぎっ子学習状況調査」(教科に関する調査と質問調査)を実施しています。ここでは、今年度の調査結果の分析から、夏休みを前に保護者の皆様にお子さんと一緒に考えていただきたい内容について提案します。

## お子さんと、学習について話をしていますか？



今年度の質問調査の結果を分析したところ、「家の人と学習について話をしている」という質問と「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」という質問には、下のグラフのような関係が見られました。



このグラフから、どのようなことが分かるのですか？

赤色の四角囲みの部分に着目すると、「家の人と学習について話をしている」という質問に対して「はい」と回答した児童の中の46.9%の児童が、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」という質問に対しても、「はい」と回答していることが分かります。



なるほど。つまり、家の人と学習について話をしている子供ほど、計画的に学習に取り組んでいる傾向にあるということですね。※

親が、学校でどんな学習をしているのかと関心をもったり、学習で困っていることはないかを聞いたりすることは、子供が自ら進んで学習に取り組むことにつながるようですね。夏休みの学習計画について一緒に考えたり、学習の進み具合を確認したりするだけでなく、子供の頑張りを認め、励ますなど、前向きになれるような働きかけをしていきたいです。 ※ 調査対象の他学年においても、同様の傾向が見られました。

調査結果の分析から、「家の人と学習について話をしている」、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」のいずれの質問に対しても、「はい」と回答している児童生徒の方が、どの学年、どの教科においても教科に関する調査の正答率が高い傾向が見られます。

右の二次元コードから、「家庭でできる学カアッププロジェクト ウェブサイト」に接続することができます。このサイトには、これまで発行したリーフレットのバックナンバー等を掲載しています。



# 小学校4・5年生、中学校2年生の保護者の皆様へ

本調査の結果を踏まえ、お子さん自身が振り返りを行うことができるよう、タブレット等を用いてWebで学習に取り組める復習・発展用教材を提供しています。この教材では、これまでに学習した内容について復習したり、これから学習する内容にチャレンジしたりすることができます。

テストの結果は、自動採点ですぐに確認でき、正解するまで何度でも繰り返し取り組むことができますので、夏休み中の家庭学習に、ぜひお役立てください。

注：本教材を利用するために必要なIDとパスワードは、学校から配付された個人票「あなたの回答」の裏面に記載してあります。

## 利用の仕方

### ◆アクセスとログイン

- ① タブレットやパソコンを用意し、インターネットに接続します。

下記のURLにアクセスすると、右のようなログイン画面が表示されます。



小学校4年生  
向け



小学校5年生  
向け



中学校2年生  
向け

- ② IDとパスワードの入力欄に、下記のログインIDとパスワードを入力して、[ログイン]を選択してください。

【あなたのID・パスワード】

【ログインID】 学校から配付された個人票「あなたの回答」の裏面に記載してあります。

【パスワード】 記載してあります。

※ID・パスワードは半角英数字です。

この部分をクリックすると、キーボードやキーパッドで入力できるようになります。

- ③ ログインすると、ホーム画面に切り替わります。

【利用期間】

令和7年6月30日から  
令和8年3月31日まで



ログイン画面



ログイン画面



ホーム画面

